



座談会

「あすの横浜をめざして」

出席者



井手 文雄

横浜国立大学名誉教授  
財政学・磯子区在住



丸尾 直美

中央大学教授  
経済学・神奈川区在住



細郷 道一

横浜市長

## ○横浜のよいところ・わるいところ

(井手) 私は、出身は九州でありますけれども、相当長く横浜におりまして、いまではハマツ子というような気持ちになつております。仕事の関係でよく東京に行きますけれども、東京に比べると私の住んでいる磯子区の周辺はまだまだ緑が多いということ、それから東京からの帰りに京浜急行の屏風ヶ浦という駅に降りますと、何か空気が清らかである。そういうようなほつとした感じを受けます。過密大都市ですが、地域によっては、まだ横浜にはそういう点が残っているということがいえます。そして、横浜には港がありますし、山下公園や山手方面から港や海に接することができまうので、私としては、横浜は住みよいし、好ましいところである。こういうふうに思っているわけです。

ただ、悪いところを言いますと、一つは汚いという感じですね。これは、よその都市もそうでしょうけれども、非常にごみが多い。私の家の庭にも空きかんを投げ込んでいく人があります、そういう点では横浜市民の公共心といえますか、それが案外低いのではないか。また、近代都市としての荘重さ、立派さといえますか、そういう街並みや

家並みが非常に少ない気がする。そういう感じがいたしません。

それから、交通が悪いですね。地下鉄も県庁や港の方には行っていないし、斜めにむすぶ交通の便が非常に悪いようです。

(丸尾) 私は、十五、六年横浜にいまして、初めはあまりいい町だと思っていなかったのですけれども、最近、魅力のある町になってきつつあるとの印象を持っています。横浜には魅力ある環境の要素といえますか、「アメニティ(快適性と魅力) 資源」ともいべきものを多く持っていますから、それを生かしていけばいい町になると思います。現に魅力が出てきたというのは、不十分ながらそういう「アメニティ資源」を生かす努力がはじまっているということにあると思うのです。

横浜の魅力の一つは、海があり、そして町に起伏があるということですね。起伏のある町というのは、それだけで魅力がある。横浜は自然の海、起伏という魅力ある町の要素を持っている。

それから第二に、歴史的環境あるいは文明開化時代の歴史的な魅力のある建造物を残しているということですね。

また三溪園という名園や「港のみえる丘公園」もあるわけです。それが横浜の魅力になっています。

三番目が、文化の面で、文明開化以後のエキゾチックな雰囲気と文化を持っている。ちょっと前までは、神戸辺りに比べると、あちらの方がそういうよさを生かしているという感じだったのですけれども、最近山下公園の周辺や大通り公園、馬車道通り、伊勢佐木町などを見いきますと横浜の環境と文化の長所を生かした魅力ある街づくりがはじまったという感じがします。何とか一生懸命やって、世界に誇れるような魅力ある町にしたいものだという気持をもつようになってきています。

欠陥といえば、いま井手先生がおっしゃいましたけれども、まだ本当にもてる「アメニティ資源」を十分生かしていないことが、残念です。せっかく海がありながら、その海が港として経済的には生かされているとしても魅力ある環境としては生かされていない。それから河川がまだ汚いままである。その川が「アメニティ資源」として魅力になつていくというよりも、むしろどぶ川として環境をそこなつていく。そして汚いならば埋めて道路などにつかおうという感じになってきていますがその考えは残念だと思いま

す。やはり人間は、緑と共に、あるいは緑の次にきれいな水を望むようになる。都会の人はとくにそうです。河川とか、海とか、池とか、湧水とか、そういう「アメニティ資源」を生かしていくと、町の中で楽しい魅力ある環境を享受できるようにするのはないかと思うのです。

(市長) 私は横浜で生まれて、二十才ぐらいまでいて、その後、逗子から東京へ通っていたものですから、横浜をわりに横目でにらんでいたわけです。それだけにある程度の予想というのを持って市長職につきました。そこで一つは昔の横浜のよさというのが残りながら、ちょっと統一がないという、まとまりがないというんでしょうか、そういう感じがしましたね。というのは、私も野毛山の近くで生まれたものだから、さつき丸尾さんがお話しになったように、あそこは丘で海が見える。港というものが、非常に自分たちの気持ちや生活にはまり込んでいるという感じがしていたわけですね。事実、私は老松小学校出身ですが、あそこの校庭から見ると、赤燈台と白燈台の間を、船が毎日入ってくるわけですね。一つの絵のようになっていました。そういうのを見てきたものですから、それと比べて現在はどうかということに、どうしてもなるわけですね。よさは残

っているけれども、よさが十分生かされていないなどということを感じましたね。

それから、横浜という町は非常にきれいな町だったと、私は子供心に覚えているのですよ。特に関内を中心に非常にきれいな町であった。山下公園の近くに、ずっと商館が並んでおりまして、商館はそれほど大きくない建物だけれども、前庭に芝が植わっていたとか、それなりに形をなしていたわけですね。そういうものがなくなってしまう。それが非常に残念だという感じがしましたね。これは地震とか震災とかいうものでなくなってしまったわけで、それだけの理由があったわけなんでしょうが。それと関内を中心とする道路にコンテナトラックがこんなに走っている都市はないですね。少なくとも大都市ではないわけです。ほかの都市では、たとえば昼間はトラックは入れないとか、朝晩時間を制限をするというようなこともやれるのですけれども、横浜の場合は、それをやったら港の機能が止まってしまうという点があるわけですね。そうかといって、周辺にはまだまだ緑が多く残っている。しかし、市民意識というのにはずれが感じられる。私は、一面では、将来への大きな希望と一面ではある種の挫折感を持つわけですね。

横浜市は、高度成長期の急膨張のあおりを直に受けたのではないか。

そこで私はそれらの個別の感想を要約していくと、横浜という都市は、やっぱり港が一つの目玉である。それは文化的にも文明的にも、またやはり世界への入口としても港というものを中心に、市民が楽しめるような街にしたい。いま横浜で生まれた赤ちゃんは、ちょうど二十一世紀には二十才になるのですから、そこに、一つの照準を置いて横浜の新しい街をつくっていく余地が、十分残されているのではないか、またそういう楽しみがあるのではないかと、いうことを、私は概括的抽象論ですけれども感じました。そんなことで仕事としては道路とか下水というようなものがある程度の水準までもつていかなければならぬだろうというので、力を入れております。

### ○大切な地域コミュニティ活動

(丸尾) 先ほど環境とアメニティのことをいいましたけれども今度は福祉の面で申しますと、だんだんと市町村の末端のコミュニティの部分でやるべき行政や、福祉の問題が

ふえてくることに注目すべきだと思います。福祉や医療について国のレベルでは形が整い始めたわけです。形式的には大体整ってきた。県のレベルの仕事も一段落してきた。そうやってきますと、市町村のところがこれから福祉でも環境でも中心になってくるわけですね。

福祉の面でいいますと、たとえばイギリスの一九六八年のシーボーム委員会報告、それに基づく一九七〇年の地方社会サービス法、それからスウェーデンが一九七七年に出しました社会福祉審議会の報告書などが、一貫していつていることは、年金のようなものは、全国的に総合化する。

それに対して社会福祉の対人サービスの問題は、末端の市町村のコミュニティ・レベルで横に総合化するということです。そこで市町村自治レベルにおける福祉改革の横の面の総合化の問題が、これから非常に重要になってくると思います。これを本當にうまく機能させるためには、そういうシステムをつくらなければいけない。これは縦割りにいくのではなくて、横に、たとえば福祉と医療、あるいは雇用、環境、教育、そういったものがうまく有機的にシステム化されて、そして経済的にも改革の重複や非整合から生ずるムダをなくして合理的にしていく必要があります。

そうしますと中心は地域コミュニティになるわけです。地域のコミュニティの人々がそういう問題に対して関心と、参加意識を持って、ボランティア組織を発達させ、美しい魅力ある環境づくりと心のふれあいのある社会福祉サービスのために、積極的に活動する、そういう方向に機運を盛り上げていくことが重要だと思うのです。地域コミュニティの人々がこうして環境の美化改革と社会福祉活動に住民意識を持って積極的に参加し協力するかしないかで町の雰囲気は全く違うものとなります。

### ○港を中心とする街づくり

(井手) これからは福祉の問題も文化の問題も非常に重要であります。文化の問題など、特に私、興味がございますけれども、ただ、いま市長さんがおやりになっておりますような下水道の整備を中心とする公共事業に全力傾倒というところに、私はこれは非常に賛成です。福祉、文化というものも重要だけでも、それが育つためには、何と云っても都市が近代的な体裁を整え、基盤を持たないと、どうにもしようがないですね。

ところが、横浜というのは非常にずうたいは大きくなっているんだけど内臓疾患が多いとか、骨組みが弱いという一種の虚弱児みたいなところがあります。ですから、近代都市としての基礎的な骨組みをつくるのが、何を置いても根本だと思っております。そういうような近代都市としてのしっかりした器の中で、福祉と文化が、花を開くというような気がするのです。それと同時に、近代都市としての景観というものが必要だと思っております。近代都市としての道路と街並み、これが非常に必要だと思っております。それから横浜は、やはり港ですね。港を中心にしなければなりません。

ただ以前の横浜港は、きわめて人間的で、ソフトな港であったわけです。「みなと横浜」という言葉でうかびあがる港のイメージはこんな港だったのです。つまり港は人々の出入りするところであり、それを中心としているいろいろなショッピングの店や金融機関、そのほかの施設などがあり、多くの人々がにぎやかに集って、たのしむ場所が形成されていたのです。ところがいまは物流の基地になって、人間をシャットアウトする非人間的なハードな港になってしまっているのです。このように人間拒否的な港になってしまっているということが、問題だと思っております。港を中心

とする人間性の豊かな町にするという思い切った町づくりがこれからの横浜には絶対に必要だと思っております。山手から海岸通り、山下公園から市庁舎があるところ、伊勢佐木町、大通り公園あるいは関内一帯ですね、この辺を市民の憩いや楽しみの場所といえますか、市民の街といえますか、それをつくる。これは、夢物語のように思われるかもしれませんが夢におおらせず実現しなければなりませんし、実現可能だと思っております。そういうことを実現することによって、横浜のユニークな社会、文化というものが生まれてくると思うわけです。

(市長) 私は、さっき申し上げたような、横浜の過去の姿と現状の認識の上にたって、横浜という都市の経営の目標を三つ立てたわけなんです。第一は地域の連帯感を盛り上げるために、市政は何をやった方がいいか。第二は横浜市としての地域全体の一体化、これを盛り上げるにはどうしたらいいか。第三は、首都圏の中での横浜の主体的役割を確立したい。これは経済的にも文化的にも、あるいは教育とか生活圏とかいろいろの意味においてです。横浜という都市経営をする上での三つの目標を立てて、その考えのもとでいろいろな施策をやっていくように考えています。

## ○自治体の仕事と新しいこころみ

(市長)それから、自治体というものは何だろうか。古い形でいえば、自治体というものは、そこに住む住民の日常のいろいろな生活が、自己完結的に処理されるようなものが自治体であり、またそこに住民意識も芽生えた。しかし、いまのように情報や社会経済の動きが激しくなってくると、自治体はそこにあつて何を考えるかという、私はやはり自己完結とはいかないが、なるべく市民の皆さんが、その地域でいろんな生活を享受できる、そういうふうに盛り上げていくのが自治体の仕事である。それがその自治体の特色も出せるだろうし、主体性も持てるゆえんじゃないだろうかと考えています。生活の水準もあがつて複雑になつてきていますから、そんなに完璧な意味でのそれは望めませんが、できるだけそういうものを横浜は横浜として考えていく、そして足らざるところはよそから補つていくというようないき方をねらいにしていくべきじゃないだろうか。少なくとも自治体ともいうものである限り……。そういう意味での主体性の確立、経済的にも文化的にも、その他いろいろな施策万般においてそういうものがなければいけな

い。

たとえば道路にしても、いままでは横浜の道路は東京指向の道路であつたわけですね。これは横浜だけではなく、全国ほとんどがそうなのです。やっぱり横浜ということになると、港というものが一つの目玉というか、核なものですから、横浜の中心部へ来る放射状道路の整備に力を入れていく。放射線と環状線によって、横浜の中心部を取り巻く道路網というものがつくられていく必要があるのではないか。それからもう一つは経済の主体性の問題ですが、これだけ港の機能を持っていた、もちろんなお近代化の余地があるけれども、これだけの規模を持っているものが、いまのままではいけませんとジリ貧になつてしまう。港の機能を生かすにはどうしたらいいか。去年横浜で「みなと経済振興懇談会」というものをやつた。各界の十五人にお集まりいただいたのです。そういう人たちが一堂に会したことは、いままでなかったのですね。そこでみんなが一緒に集まつて共通項としてやることは何か、個別にやることは何かというのを相談する場所をつくりましょうということでした。それを相談しました。その中で一番先に出てきたのは、やはり道路交通であつたわけです。今年もベイブリッジを手が

けたわけですからけれども、やはり関係の方もそういう意識に燃えてやっていく必要があるだろう。今度は「文化問題懇談会」というのをやりたいと思っています。これも横浜の文化をどういうふうにして盛り上げていくか、それに行政がどの程度のかかわり合いを持つかということです。

従来文化行政というものは、何か施設をつくっていくというようなことが、非常に多かった。それも私、必要だと思いません。同時にそれぞれの地域で、その地域の住民が、文化性を見出していく、そういう意欲を持って動いていく、そういうことも、私は文化に必要じゃないかと。したがってその辺のところをひとつ広い、高い角度から議論をしていただくかと考えております。

### ○さわやか運動のねらい

(市長) それから、実は私、選挙で市内を走り回って、道が汚いという感じがしたのですよ。そこで、「さわやか運動」をぜひ進めてみようと考えました。先ほど井手先生のお話にもあったように、あちこちそれで、私はやはり街をひとつみんなできれいにしようじゃないかと思ったのです。

都市の美化運動というのは従来から進められているわけですが、私は多少これに欲の深い将来の望みを、託しているわけです。このことの中に、市民の意識、そういうものが育たないだろうか、将来の子弟の教育面でも効果が出ないだろうか、いろいろ欲の深い考えを持っているのです。ひとつみんなで意識を持つとよといっても、それは精神運動に終わってしまう。そうではなくて、具体的に町をきれいにしていこう、身の回りをきれいにしていこうという、具体的な実践を通じて、市民の意識が育っていくのではないかと考えているわけです。

もう一つ、行政サイドも、いままで街の美化はやったのですが、縦割りであった。道路は道路、河川は河川、公園は公園というふうに、縦割りでした。したがってその谷間のところは、手が付けられないままになる。そこはひとつ、われわれ行政サイドも横に結ぼうじゃないか、面的に問題を考えよう。それからもう一つは、市民の皆さんのそういう御協力を得る意味で、区長中心にことを運ぼうじゃないか。「さわやか運動」に関しては、区の中でも、地域、地域によってやり方も違うし、考え方も違うわけですから、



区長を中心にして、それぞれの地域ごとの自主的な活動が起こせるようにしたい。まだ半年なものですから、効果のほどは、どこまで出たかいろいろ批判もあるでしょうけれども、反響は、かなりあるというふうに見ています。

(丸尾) より住みよい、魅力ある環境というのは、安全で衛生的だということがまず第一、下水の整備等はそういうことでしょう。また、便利であること、すなわち道路等の整備です。それからだんだん美しい町ということで、「さわやか運動」の一つの側面、それからさらに、ただごみがないだけではなくて緑があって、きれいな水が流れている、そういうまさにさわやかな環境を望む。さらにもう一段いくと、単にきれいに整然としているというだけでは魅力がない。そこに何か潤いがなければいけない。潤いは文化であり歴史環境であり、そういうものをほしくなる。さらにもう一段いくと、まだ何か足りない、それは人間の心の触れ合いであります。

そういうように、安全とか保障とかはセキュリティ、二番目の美しさとかさわやかさとか、そういうものはアメニティ、それから心の結び付きはコミュニティと、そういういたようなものを総合的に備えた環境というものが本当に人

間的な魅力ある環境じゃないかと思うのです。現段階としては、基盤からやっていかなくはいけませんから、下水道整備とか、「さわやか運動」というところに市長さんが重点を置かれたのは、当然であろうと思います。

しかし、長期的に見ますと、さわやかも、もう少し高次元のさわやかさに、だんだん移っていくということを、市長さんも考えておられるのではないかと思います。魅力ある快適な、アメニティの水準の高い町をつくっていくということですね。

### ○人口集中のメリットの活用

(井手) 横浜は人口がふえすぎたということで、なるほど確かに過密です。いろいろの公害、混雑というようなデメリットもあるわけです。それに対応はしていかなければいけない。ところが私は逆に人口の集中というものにも、メリットがあると思うのです。これは精神的なエネルギーとか経済的購買力とかいうものであります。人間が少ない都市というのは、活力のある経済、あるいは活力のある精神状態にならない。どっちかというとなんて退かすね。あ

る程度の人口量というものは活気のある都市としての要件であるわけです。二百七十万、横浜は過大人口といえますけれども、この人口というもののメリットを生かしていく必要があるのではないかと思います。横浜に、東京にないような安いものが安くてあれば、横浜市民は、それを買うでありましょう。そうすれば、横浜の膨大な人口のもつ膨大な購買力を東京へ奪われることはなくなります。購買力というものは、人口が多くなればなるほど多くなるし、そしてまた市が経済的に繁栄し得ると思うのです。ところが横浜にはこれだけ多くの人口があり潜在的購買力も大きいのですが、それに対応する要件が欠けているようです。その一つは、小売店が少ないということです。だから商業が発展していない。横浜は商業、つまりすばらしいショッピングセンター、美しい、楽しい商店街が少ないのです。東京のデパートや商店と横浜のそれらとを比較すると、従業員の態度等々各段の相違があつて、向こうは洗練されて客扱いがいい。横浜はおっとりして、いかにも田舎らしい、という違いを感じる人が多いのです。これは横浜では店の数が少なく競争が東京ほどはげしくないということに原因があるように思われます。こういう点が非常に立ち遅れ

ていて大都市としてせっかく持っている大きな経済的、精神的なエネルギーのかなりの部分を、東京に吸収されているというような気がするので、まことに惜しい。

### ○独自の文化・技術・伝統をよびもどす

(井手)もう一つ欠けている要件は横浜独自の文化とか技術というものです。横浜は明治期の文化の発祥地であり、たとえば山手にありましたゲーテ座にしましても、そこで初めて近代的な劇というものが上演されたのです。そして東京の有名な文士や文化人などがこれを見に来るといふことになっていました。

こういうように横浜は、かつてはわが国の文化の中心地であり、そういう雰囲気の中からは、横浜独自の産業とか技術とかが生み出されたのです。たとえば、洋服なども、横浜の洋服屋はすぐれた技術と独特のデザインとをもっていて、横浜人はもとより、東京人も洋服を横浜で注文するということが、一つのだてであり、誇りでもあった、というのをきいています。

たまたま洋服の例をひきましたですが、洋服は産業であり技

術であり、そして一種の文化といってもよいと思うのですが、このように、横浜独自のすぐれた文化や技術や産業は、横浜市民以外の人々の心をひきつけ、その購買力をも吸収することができたのです。今日の横浜も、かつての誇り高かった時代を想い出し、独自の文化、産業、技術を持つようにならなければなりません。このことは港を中心とする独自の環境とムードの中で醸成される横浜人の誇り高き精神の創意と工夫と、そして適切な行政的バックアップとによって、必ず可能であると思います。

これによって、東京へ向きがちな市民の心を横浜へ向きかえさせ、東京での消費を横浜での消費に切りかえさせることができると思いますし、逆に東京その他の首都圏の人々を精神的にも経済的にも横浜へひきつけることができると思います。

文明開化時代、日本文化のリーダーとしての存在を誇っていた横浜が、いまや、その伝統を忘れ、文化的にも経済的にも首都圏の中に埋没しているのは、まことに残念なことです。日本ぜんたいのためにも好ましいことではありません。横浜には各界にわたってすぐれた人々が在住しているのですが、以上のような理由から横浜に関心を持たず、も

つばら東京の文化の発展に、そのすぐれた頭脳が活用されているありさまです。こういう頭脳を横浜にひきとめねばなりません。そのためには、魅力ある横浜文化の創造が先行しなければなりません。

(市長) いま洋服の話が出ましたが、私も実は東京に住み、大阪に勤務していても、長いこと戦前横浜の弁天通りにあった洋服屋さんで洋服をつくってもらっていたんです。それは、おやじが貿易商だったものだから洋服を着ることが多く、私もつくってもらっていたんですけれども、着てみて実にいいんですね。人によって洋服をどう評価するかあてつけようけれども、スタイルとか何とかは時代の問題だけれども、手を上げたり下げたりするときの肩のしまり方、これが私は洋服の生命だと思っています。ところがいまいった横浜の洋服屋さんは、それができるのです。長いことつくってもらいまして、その人は十年前に亡くなってしまいました。が、やっぱりそういう技術というものはあつたんじゃないでしょうか。

(井手) 技術は最高級だし、見た目にもすばらしいデザインだしということで、東京からみんなこっちに来たわけですね。ところが、今はそういう顧客は横浜から逃げてしまっ

ているわけです。それをもう一ぺん引き戻す必要があります。

### ○魅力ある商店街づくり

(市長) またいまおっしゃるように、商業が弱いですね。

従業員の接客態度もやっぱり競争心がないということは何いておりませぬ。ですからこれから市内に、拠点開発といいますが、戸塚は戸塚、横浜線の沿線なら沿線でやっていくことが必要と思う。また人口の流入で、各界の頭腦的な人が随分横浜に住んでいますね。ですから、活用といたって失礼な話ですけれども、発掘していくのは、今後の課題でしょうね。

(丸尾) いまおっしゃられたようなことは、大体同じように考えております。商店街を、魅力あるもの、楽しいものにするという考えは私も大賛成です。このことによつてアメニティの改善と経済的繁栄が両立するのですから結構なことです。そこで、何が魅力かというのを考えていきますと、最近元町へ東京からも来る人が多くなっています。あの魅力というのは、一つは、もちろん個性的な、しかも

外国から入ったエキゾチックなものをたくさん売つてるといふことがあるでしょうが、それ以外に、後ろに丘があり公園があり、片方に海があり、エキゾチックな雰囲気がある。そういう環境の魅力があると思うのです。だんだん商店の魅力というのが、商品そのものももちろんありますけれども、その価値に、雰囲気とか環境の魅力というのが大きな意味を持つてくる。馬車道や伊勢佐木町の再開発にしても、そういう人々の意識の変化に対応して、ああいうことをやったわけでしょう。それから交通をよくしてまん中に集まるというの必要ですが、これだけ大きい都市ですと、やはりかなりの人口がある区とか、地域では、そこで買ひものもレジャーも楽しめる総合的な魅力ある場所がいくつもあると思つていいのです。欧米の都市と比べて感じるのは、横浜はこれだけ、二百七十万人もいて、そのわりには各地域に文化のセンターがないことです。欧米の場合ですと小さな町でも、中心に図書館があり、博物館や音楽ホールがあり、文化機能をいろいろ持っている。私はそこがちよつと井手先生と違うのですけれども、集中しすぎることをむしろ心配しているのです。もうちよつと各拠点でそれぞれ楽しい場所があつていい。中心に出てい

かなければ楽しくないのでなくて、自分のうちの周りを歩いたり、ショッピングに行ったり、近くの公園や博物館に行くとその辺だけで結構楽しめる、そういう自足性をもちたいと思います。

## 〇二十一世紀をめざす街づくり

(市長) 私は二十一世紀をめざす街づくりをしたいと思っています。その内容は、これから研究をしていくわけなんです。私の感じではいきますと、市民の人にそれぞれの手の届く範囲で、快適な生活を保障していく、それが自治体の仕事ではないだろうか。二十一世紀というのは、さっきもふれましたけれどもいま横浜で生まれた人が大人になって、横浜生まれの大人が多くなってくるということです。

人口の動態も鎮静化するし、いま問題になりつつある高齢化の進行という問題、そういったいろいろな基礎的な要件が変化する。それらをふまえた二十一世紀における横浜の街づくりの展望を持っていきたい。その展望は何かというと、快適な市民生活ができるようにしたい。これは丸尾先生のいわれたアメニティとは少し違うのかもしれない

ませんけれども、それに近いものだろうと思います。それから、いままでも自治体の基本構想というか、自治体宣言というようなものがたくさん出ていますが、いつてること、は、きわめて抽象的なんです。人間的な町でなければいけない、環境がよくなければいけない、緑がなければいけない、水がきれいであればいけない、ふれあいがなければいけない。私は全くそのとおりでと思うのですが、それは一体市としては、そういう環境をつくり出すには何をしたらいいのだろうか。いわば快適な条件の中心は何だろうか。これは生活万般にわたるから非常に広いのでしようけれども、そういうものをだんだん整えていくことではないかと、私は思っているわけです。それは、たとえば雇用の問題、それから福祉、医療、教育、文化、物資―物資なんかも全部というわけにはいかないが、日常の生活物資というものは、なるべく手近なところで供給できるようにしたい。たくさんあると思えますけれども、このように各分野での条件を、地域的に順次整えていくことが、市の仕事ではないかと思えます。そこではじめて市民が安心して心のゆとりを持った、快適な生活を楽しめる。それを二十一世紀をめざしての横浜の街づくりと、こういうふう

にぼくは考えているんですけれども、これについてはどうでしょう。これからの研究課題なものですからね。

実は具体的に申しますと、五十四年度は人口その他の動き、かつてつくりました総合計画策定のとときと情勢が変わりましたので、そういう基礎データのものを集めてみたい。その上にたつて将来像を描いて、それに近づく戦略と申しますか手法と申しますかそういうものを整理していくことが、必要ではないかと思っております。

### ○安心して暮らせる快適な地域づくり

(井手) 広い横浜ですから、地域や、地区ごとにそれぞれの快適な生活条件を築いていき、その地域で市民が楽しむということがまず根本で、このことは確かに必要ですね。同時に先ほどからの、市全体としての統一性というか、これは対立するものではなくて地域地域それぞれの自己完結的な共同社会と市全体の統一性というものを、並行してやっっていく、こういうことが必要であろうと思います。横浜は他の巨大都市にくらべて統一性という点で、はるかに劣っているように思えてはならないのです。

ところで地域的な共同社会についていえば私もだんだん高齢化してきつつあるのですけれども、健康をまもつてくれる地域社会を切望します。快適な生活ということは、まず根本的には、安心して暮らせることであり、これは経済的な問題と同時に、健康の問題でもありますね。私は近くの開業医を一軒決めておりまして、その先生に診ていただいているわけでありませうけれども、夜中に心臓発作でも起こったらどうなるか、あるいは連休のときにおかしくなったらどうなるか、その先生が迅速に往診してくれるかどうかということをおもいますと、恐怖感にかられます。診療制度の整備充実によってこういう恐怖感を一掃していく必要があると思えます。たとえば夜中や休祭日における急患の診療をやってくれる医療センターのようなものが地域ごとにできればわれわれ市民も一応安心して暮らせる。こういうようなことも地域における快適な生活の一つの条件、高齢化社会における条件として必要です。一日も早く整備されてほしいと思っております。

(丸尾) 地域でもみんなアメニティの潜在資源はいっぱい持っているわけですよ。それを生かすことが快適で安全な生活を経済的にすごせるようにするために大切なことです。

私が住んでおります所は非常に起伏があつて、以前池があつたところです。この池というのは、本来大変なアメニティ資源ですね。池や河原や起伏のある丘などイギリスなんかだったら、ピクニック場です。自分の庭がなくても、サンドイッチと湯沸し道具を持って行って、お茶を沸かして楽しんでるわけです。それから博物館とかそういうものも、わざわざ建てなくても、その辺に魅力ある古い建物があつたら、そういうものを生かして一部を喫茶室やレストランに賃貸して、他の一室にその地域の民芸品とか、陶器とか、美術品など陳列したり、そこで地域の人々が出品する美術品とか盆栽などを展示すれば安上りで魅力ある文化センターができます。これからゆとりが出てきて、余暇が特に増えてきますと、だれもが享受できるような環境をつくっていくためには、身近に魅力のある庭園とか博物館とか、楽しい散歩道やピクニック場が必要だと思ひます。

(市長)公園をつくりましても、みんな公園の使い方がうまくない。それから、人が行くところでなければ楽しめないと思ひているわけです。自分一人で楽しむというのではないわけです。だから本当の意味で自分の心を大切にしていくかどうか。自分一人で探していく、楽しんでいくそし

て心豊かになる。私は文化の基本はそれだろうと思ひますけれども、残念ながらそれがなくて、新聞に書いたところに「行ってみよう」ということがあるのですね。

(井手)それともう一つは横浜の産業、これはハードウェアであると同時に、第三次産業部門も、もう少し発達させなければいけない。また、出版業も東京に集中しているでしょう。出版というのは、特に日本では中央指向型だけれども、首都圏ですから、横浜にも大出版企業が勃興したつていいんじゃないでしょうか。

(丸尾)そう思ひますね。それに、本、政府刊行物など情報についてもセンターがほしいですね。

(井手)そういう文化面が本場に低いですよ。

(市長)今度、「文化問題懇談会」で勉強させてもらいます。

(井手)それから明治、大正以来、横浜を舞台にしたい作品が、随分あります。有島武郎、生馬、谷崎潤一郎、大佛次郎、そして、吉川英治だって、みんな横浜の特色をよく生かした作品があります。そして古くは島崎藤村の「桜の実の熟する時」だってあるわけです、そういう作家、芸術家の意欲をかきたてるものが、いまの横浜にはないです。

ね。これは都市づくりですよ。そうした都市づくりをやっているわけば今度は日本の芸術家、作家が横浜指向になってくるのです。東京のすぐそばに、東京に欠落しているいろいろの文化的要素もっている横浜というユニークな都市があれば、明治、大正のように横浜を背景にした芸術活動というものがぐっと活発に起こるはずなのです。

### ○市民のボランティア活動への期待

(市長) さっきいっておられた近隣の池や小川を残してということは、いまのしかけだと行政におぶわされてしまうのですね。市が買うといっても限度がありますね。

(丸尾) やっぱりひとつはゆとりだと思えます。いままでは余暇がないですから、本当に自分のところを愛すべき環境にするという意識がなかったけれども、余暇がふえてくると、違ってくると思います。またそういう運動をして、魅力ある地域コミュニティをつくった具体的な見本がないと、わからないわけですよ。結局、どうなってるかというところ、市がやれば、町の並木でも何でも雑草で囲まれようと枯れようが市民は全然知らない顔をしている。だから並木

でも公園でもやるとしたら、徹底的に市がやらなければならなくなってしまう、非常に金がかかってしまいます。それをボランティア組織を活用して、その活力を生かしていけばいいと思います。市はもちろん、やるべき基本的なこととはすべきですが、必要以上に金をかけないで快適な環境と生活の質を維持することを考えるべきです。イギリスではカントリー(田園)を大事にして、これ以上手をつけることができないような、完成した美しい田園都市をつくり、また福祉サービスもよくやっているコミュニティがあたりこちらにあります。あれは市が全部やってくれるわけではないのです。ボランティアが非常に大きな役割りを果たしております。その活力を、社会福祉やさわやかで美しい環境づくりに生かす方法は、必ずあると思うのです。

(市長) そういうことをぜひ、やっていきたいですね。

(司会) 寺内 孝企画調整局長)